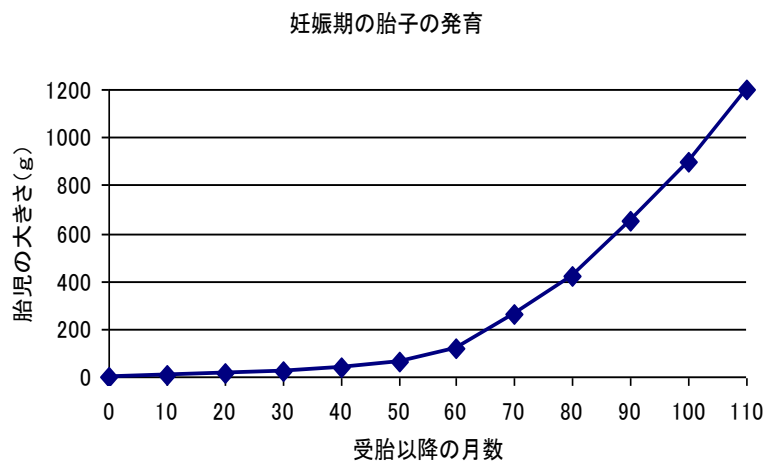


## 妊娠後期への増飼いの効果

生産に掛かる固定費は同じなので、産子数が増えることで如実に生産原価が下げられることを以前紹介しました。最近の養豚情勢の中では特にコストにこだわらなければなりません。すなわち現状の低豚価に対応したコスト体系の抜本的な取り組みが必要です。

生存産子数は変わらなくても生時体重を大きくすることで活力も増し、哺乳中事故率も低下するはずと考えるのは当然です。子豚を大きく生ませるために、**妊娠 100 日前後から 2 週間弱(12 日間)の増飼い(ましがい)はごく一般的です。**ことコストについて大きなウェイトを占める飼料にかかわることですから、本当にその効果はあるのか正しい認識を生産者は常に求めていることが想像されます。豚の栄養のパイオニア的

存在のカンザス州立大学でまとめられた記事を参考にしました。



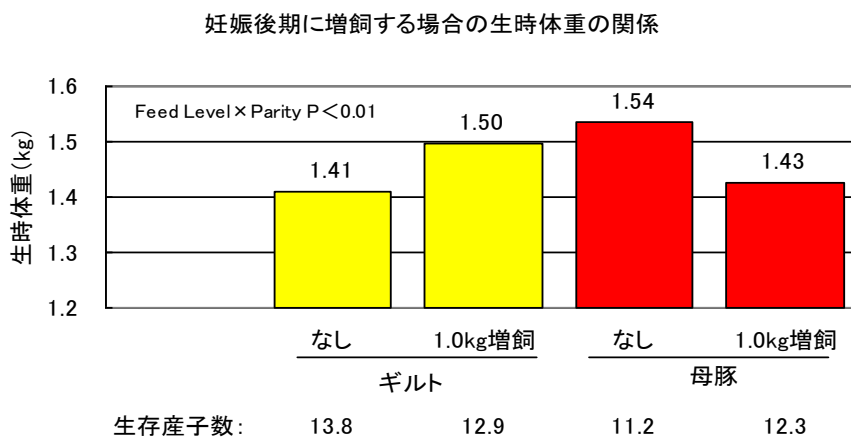
妊娠期の発育曲線はごらんのよう  
に妊娠後期に急増しています  
(左グラフ参照)。

これを見れば何とか生時体重の増加につながらないかと考えるのは普通です。しかしやりすぎて弊害が出てしまっても問題ですから、ギルトと母豚(経産豚)について確認して見ました。

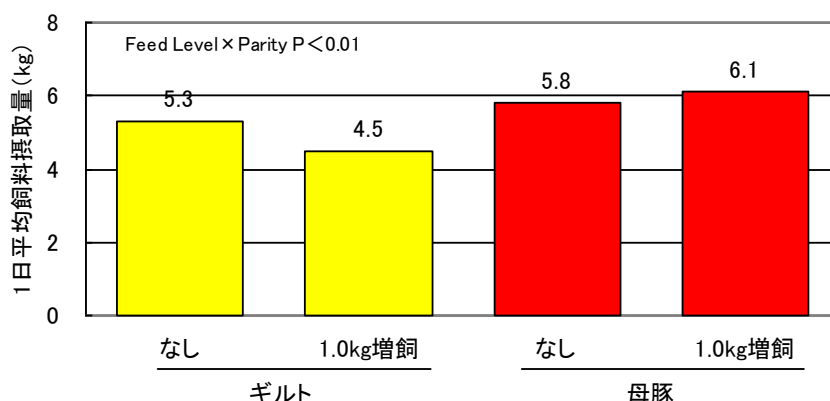
大部分の胎子の発育は妊娠の後半3分の1である。  
そのため多くの生産者が妊娠後半に増飼をする習慣になっている。

共に 1kg の増飼いを分娩前に 12 日間おこなうか、おこなわないかで生時体重への影響を見てみました。ギルトは増飼いによって確かに生時体重の増加があるように見えますが、産子数の違いも考慮すると**母豚とともに明確な効果(生時体重が増加する)はなさそうです。**一方、分娩後のギルトや母豚への影響はどう

でしょうか？こちらこそがより重要だと研究者は示唆しています。

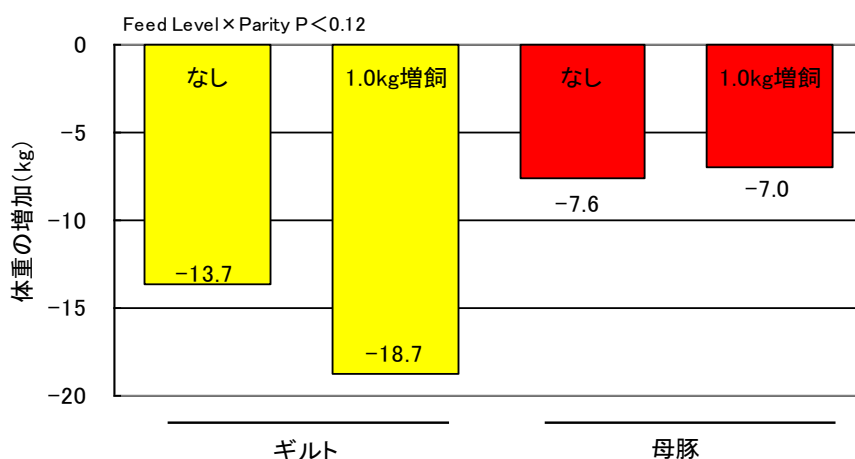


### 授乳用の飼料摂取



※分娩前妊娠90~112日で増量(1kg)した時としない時の授乳期の食い込み

### 分娩から離乳までの母豚体重の変化



母豚では授乳期の食い込みにさほど変化はありませんでしたが、**ギルト**は増飼いしたことによって若干ですが**食い込みが落ちてしまっている**ようです。

妊娠後期は非常にデリケートな時期なのでギルトのボディコンディションも関係していると思われますが、体格が比較的小さなギルトには相当無理がたたったのではと考えるのはごく自然でしょう。この証拠に分娩後の体重の変化を見ると、**ギルトへの増飼いはかなり食下量の低下を招いており、ギルトが分娩後の肥立ちが悪く、熱発や食滞に準じた症状を呈して消耗している可能性も示唆される**内容でした。

こうした結果から、カンザス州立大学では次のようなコメントを発信しています。

#### <妊娠後半で12日間+1.0kgの増飼いをさせる効果のまとめ>

- 生時体重の増加に対するメリットはない
- **ギルト(初産)では授乳用の食い込みが減少し、大幅な体重減少も見られた**
- **特に痩せた母豚には1kgまでの増飼いは可能だが90日以前の妊娠中期に徐々に  
行うほうがよい**

妊娠期の栄養状態が極端に悪いケースを除き、通常は母豚を妊娠中に徐々に適正コンディションにもっていく方がメリットがありそうです。優秀な生産者の中には種付け前後からほとんど給餌量を変えない人もいます。高度な技ですが、ボディコンディション、特に分娩舎での食い込みが順調な証拠でしょう。

(カンザス州立大学のデータを元に考察)